

ルードルフ・フックスとペトル・ベズルチ  
——『シレジアの歌』の翻訳をめぐって——

Rudolf Fuchs und Petr Bezruč

浅野 洋

ASANO Hiroshi

# ルードルフ・フックスとペトル・ベズルチ ——『シレジアの歌』の翻訳をめぐって——

Rudolf Fuchs und Petr Bezruč

浅野 洋

ASANO Hiroshi

Resümee: Der Dichter Rudolf Fuchs, der 1890 im mittelböhmischen Städtchen Poděbrady 40km von Prag geboren wurde, war ein tschechischer Jude, der in der Kindheit tschechischsprachig aufwuchs, weil die Mehrheitssprache in der Region Tschechisch war. Aber seine Eltern schickten ihn zur Schule-Nikolander in Prag, die auch Rainer Maria Rilke besuchte. In diesem kulturellen Milieu begann er mit 11 Jahren Deutsch zu lernen. Mit Übersetzungen der Gedichte „Schlesische Lieder“ des Lyrikers Petr Bezruč trat Rudolf Fuchs an die Öffentlichkeit, damit er in der Zeitschrift „Prager Tagblatt“, „Prager Presse“, erscheinen konnte. Dann erschien sein erster Gedichtband „Der Meteor“, in dem Rudolf Fuchs auf der slawischer Weise zum Ausdruck kam. Die vorliegende Arbeit zielt sich darauf ab, in welchem Punkt der Prager jüdischen Autor Rudolf Fuchs mit dem schlesischen Dichter Petr Beyruč verbunden war. Dabei wird rekonstruiert, was für eine Rolle Rudolf Fuchs bei der Verdeutschung der „Schlesischen Lieder“ spielte.

キーワード：プラハのドイツ語文学、第一次チェコスロヴァキア共和国、第三帝国、ゲルマン化、翻訳

## 1. はじめに

ユルゲン・ゼルケはプラハ・ボヘミア文学のその先駆的な著書『ボヘミアの村々』のなかで、その序論を「ヨーロッパはプラハで死んだ」というタイトルで書き始め、プラハの複雑した言語状況、パヴェル・アイスナーのいう三重のゲッターを説明している。本稿では、カフカ、ヴェルフェル、リルケ、若きプラハの作家たちによって形成されたドイツ語文学という、いわゆる都市文学とチェコ語作家との交流に焦点を当てて、双方の交流の実態を、そしてユダヤ人のドイツ語作家ルードルフ・フックスとチェコ人の詩人ペトル・ベズルチの関係を再構成してみたい。

マックス・プロートの『プラハ・サークル』に描かれているように、そもそもプラハのドイツ語文学というものが、きわめて人工的に作りあげられた言語であるドイツ語によって成り立ち、カフカをはじめとするユダヤ人のプラハという定義が成り立っていたわけではなかった。パヴェル・アイスナーの言を俟つまでもなく、きわめて抽象的な概念で成り立っていることに注目しなくてはならないだろう。プラハ・サークルの世代と同様にルードルフ・フックスも1890年であり、プラハ近郊のポジェブラディで生まれたが、広大なボヘミアの平原のみがあるエルベ河畔の典型的な田舎町であった。ユダヤ人である父親の事業家のもとでチェコ語の環境で育ったフックスは10歳になって、リルケも通ったニコランダーシュレーでようやくドイツ語を学びはじめる。ここに成功したユダヤ人の実業家、そしてその子弟がプラハという都市環境に身を置くという当時のユダヤ人家庭の典型が見られよう。<sup>1</sup> ルードルフ・フックスにとって外国語であるドイツ語はめんどろで異質な言語であり、かれにとって最初の異文化との衝突がこの言語体験であったことは、その後の執筆活動と合わせて考えると特筆すべきことだろう。当時のことをルードルフ・フックスはロンドンで以下のように回想している。「幸運なことに私はプラハで芸術に理解のある家族のもとで下宿した。家主は私たちにハインリヒ・ハイネを読んで聞かせてくれた…… 私はよくドイツの劇場に通い、ドイツ語の本を読み、チェコ文学のすばらしさをドイツ語に翻訳することで私の友人たちに教えてやろうとひそかに決意していた」。<sup>2</sup> ここからはドイツ語を文学、演劇から学ぶユダヤ人実業家の子弟にあたえられた特殊環境、つまりアイスナーの言う精神的なゲッターの存在を窺い知ることができよう。しかも多くのユダヤ人のドイツ語作家がこの精神的な

<sup>1</sup> Jürgen Serke: *Böhmische Dörfer—Die Wanderungen durch eine verlassene literarische Landschaft* (Paul Zsolnay Verlag, Wien, 1987, S. 248.)

<sup>2</sup> Ebd., S. 251.

ゲットーから抜け出ることによって自己解放したり、ウィーン、ベルリンに移住することによって自己解放し、文学世界を構築するのが通常のドイツ系ユダヤ人の辿る道であった。ルードルフ・フックスの場合は、文学、翻訳、共産主義が自己解放の手段であった。1939年にイギリスに亡命したルードルフ・フックスは、故郷に想いを馳せて以下の詩を残し、オストラヴァとプラハの関係、オーストリアとの関係についてその従属的な関係を憤怒をもって指摘している。この場合も、ルードルフ・フックスとペトル・ベズルチの関係がドキュメントとして残されていることによって検証が可能になっている。ルードルフ・フックスは1939年にナチスに追われて、イギリスに逃亡するわけだが、1942年にバスに轢かれ52歳で亡命生活を閉じることになる。異郷で言語の不自由を嘆き悲しみ、深まる孤独を感じながらフックスは「ライギットからの詩」を編み、150部刊行する。<sup>3</sup> そのなかに「ペトル・ベズルチへの手紙」という詩があり、かつて翻訳した『シレジアの歌』の詩人ペトル・ベズルチへの想いを詩に託して詠んでいる。フックスのベズルチへの想いと同様に郷土に羨望の眼差しが向けられている。

「ベズルチへの手紙」<sup>4</sup>

私は生涯であなたに会うことはめったになかった  
ブルノは春にその四肢を広げ、  
私はあなたとの日々をあなたのシレジアの歌のように思い起こす。

のちにベスキーードで  
私はあなたを遠くから見ていた、  
嵐と雷鳴の日に  
独り、好んで突き進むのを。

そしてふたたび1年が経ち、オストラヴァで  
隣人が私をあなたのもとへ連れていった。  
暇なき放浪者よ、あなたはあなた自身の客人に  
私には思えた。

私はフリーデクからポーランドへ出た、  
それは39年のこと。  
私は捕らえられ、ふたたび釈放された、

<sup>3</sup> Ebd., S. 256.

<sup>4</sup> Rudolf Fuchs: Die Prager Aposteluhr Gedichte, Prosa, Briefe, hrg. von Ilse Seehase, Halle und Leipzig, 1984, S. 103.

それは奇跡にひとしかった。

(略)

こうして私があなたに人生で会ったのは5度だった、  
私はあなたに遠方から挨拶を交わしている、  
ふたたびあなたと逢えたことのなんとという喜びよ、  
あなたの故郷で。

ここで問題となるのは、翻訳という行為が、二つの文化圏を架橋する行為であるのか、一方への文化の移入であるのか、という問題である。むしろそうではなく、アイズナーも力説しているように、双方の理解のもとに中間地帯の形成という意図があったのではないか。地方性と都市を結ぶという行為だけではなく、新たな文化の創造地帯であったのではないか。

この点について翻訳者ルードルフ・フックスとペトル・ベズルチの場合で考えてみると、どうなるのか。ペトル・ベズルチは、1867年アントニン・ヴァシエクの息子として、シレジアのオパヴァに生まれる。1877年に両親はブルノに移住する。プラハの大学で3年間学んだ以外は、ブルノというモラヴィア第一の都市ブルノで郵便局員としてその人生の大半を過ごした詩人である。

一方、ルードルフ・フックスはライギットで亡命時代に、混乱するチェコスロヴァキアへの「共和国は復活する」と題した灰燼と化したチェコスロヴァキアへの思いを「共和国は復活する！」(Die Republik wird auferstehen!)と題して、幼少期への回想とともに記している。「私は幼少期を中部ボヘミアの小さなチェコの町で過ごした。私の母国語はチェコ語だった。その後プラハで、私は両親が正しいと判断したままに、ドイツ語を学んだ。数年経つうちに私は作家になっていて、ドイツ語の新聞、雑誌に共同で取り組み、ドイツ語の本を著した。世界大戦の最中の1916年に、ペトル・ベズルチの『シレジアの歌』をドイツ語に訳し、出版した。……この歌はオーストリアに対するめらめらと燃え上がるような告発であり、オストラヴァとカルヴィナーの炭鉱地帯における(中略)国家的、社会的な抑圧にたいする告発であった。結局ベズルチの言うとおりになり、オーストリアは没落した。そしてわが故郷が自分の意志に反して『保護領』としてふたたび戦争に巻き込まれている今日、私は確信をもってこう言いたい、この戦争の終結でチェコスロヴァキアは自由なヨーロッパで自由になると。」<sup>5</sup> ルードルフ・フックスがいかに母

---

<sup>5</sup> Rudolf Fuchs: Die Prager Aposteluhr Gedichte, Prosa, Briefe, hrg. von Ilse Seehase, Halle und Leipzig, 1984, S. 313f.

国語であるチェコ語から首都プラハの人工的な言語であるドイツ語を習得して、文化を創造する言語にまで成長させたかの過程が述べられている。そして亡命生活のなかで、抑圧された文化に育った、一地方、一民族を代表するペトル・ベズルチという詩人への帰依に等しい想いが語られている。

ゴルトシュトゥッカーによれば、プラハのドイツ語文学の作家は、三重のゲッターのなかに置かれていた。つまり、カトリックのなかのユダヤ人、チェコ人のなかのドイツ人、社会的な弱者のなかの高位者である。この説明は、なぜマルキストが共産主義の条件のなかでこの退廃した、市民的、ブルジョア的な作家について語ることができたのか、という前提に貢献したにすぎず、明らかになったことは、この境界区分には誤りがあり、すくなくとも誇張されすぎてきたのではないか、というのが、2015年にマンフレート・ヴァインベルク教授、シュチェパーン・ズビトヴスキー博士が中心になってプラハ大学に設立したクルト・クロロプ新研究所の見解である。<sup>6</sup>

これまでプラハと郷土、プラハとズデーテン地方という対決図式で捉えられることが多かったが、プラハのドイツ語文学を独立した領域として扱うのではなく、ボヘミア全体として扱う、ドイツ語文学とチェコ文学の交流、作家間の交流、その都度の作家の交流のなかに文学生産というプロセスがあったのではないか、という提言である。この前提となっていたのは、プラハのドイツ語文学、またはプラハのドイツ語文学の作家はすべて善意の作家であるという前提に立っていたが、実態は民族的な、反ファシズムの作家もいたのが現実であったことに注目しなくてはならない、というのが新研究所の基本テーゼである。<sup>7</sup> この視点に立って、ペトル・ベズルチの『シレジアの歌』の翻訳をめぐるルードルフ・フックスの関わり方、出版に至る過程、ドイツ、チェコスロヴァキアにおける受容のあり方をみていきたい。

## 2. 『シレジアの歌』の成立の経緯

『シレジアの歌』のチェコ語版は1906年に出版される。オーストリアの軍隊の検閲機関はペトル・ベズルチの『シレジアの歌』を禁じ、ベズルチにたいし反逆罪の訴訟の手続きにはいり、ウィーンの駐屯地の裁判で未決拘留にした。また、チェコ、オーストリアで出版禁止となった

<sup>6</sup> Vgl. <http://krolop.ff.cuni.cz/de/event/15-04-eroeffnung-der-kurt-krolop-forschungs-stelle>

<sup>7</sup> Ebd.

『シレジアの歌』の翻訳版が1916年にクルト・ヴォルフ書店に送付され刊行されたことにたいし、軍事法廷が開かれる事態となった。1919年にフックスは軍役に就いたが、召集理由は、ベズルチの詩を訳している26歳の翻訳家の口をつぐむべし、ということだった。<sup>8</sup> ドイツ語版の第2版が1917年に出版され、多くの部数がドイツを迂回して、ベズルチをドイツ語で読まざるをえなくなったチェコの読者に届いた。<sup>9</sup> この一事をもってしても翻訳には、両国の文化を架橋する役割とはべつに、文化を越境させ、両国の読者層を支える役割があったという事実突き当たる。結果的にチェコの新聞は、『シレジアの歌』を世界大戦にたいするアンチテーゼとして高く評価したわけである。

ドイツ語の翻訳版に付されたフランツ・ヴェルフエルの前書きは、フックスの翻訳への支援、そしてチェコ語文学にたいする共感であると同時に、シレジア地方の特異性を表出するペトル・ベズルチの存在によって、プラハのドイツ語文学との相違、独自性を特化する意図が込められている。以下のヴェルフエルの前書きの冒頭文は、詩人ペトル・ベズルチへの導入となっている。「ペトル・ベズルチは存在しない。つまり、この名前の人物が存在しないというだけでなく、とある晩にこの名前を思いついた人物もいないということである。ペトル・ベズルチは、初期、発展期、末期のある詩作する人物ではない。かれは打ちひしがれた民衆の血と汗から立ち昇る神話化された人物でもない。ペトル・ベズルチとは、崩壊していく一族の叫びであり、一回限りの、個人とは関わりのない、説明しがたい、最後の雄叫びである。(略) ペトル・ベズルチとは、言語島におけるチェコ民衆の少数民族のことであり、オーストリア・シレジアの産業の中心地ではばららとなって言語と闘い、あくせく働き生活と闘っている種族のことなのだ」<sup>10</sup> ペトル・ベズルチという匿名によって発せられる叫びに等しい詩人の声が、オーストリア・ハンガリー帝国によって抑圧された地方の炭坑労働者の声を掬い取っている。『シレジアの歌』が成立した19世紀末から20世紀の初頭にかけての権力に対する抵抗の表現である。これは「学校のゲルマン化」、「教会のポーランド化」だけでなく「炭坑における容赦のない搾取」にたいする闘いであることを意味していた。「パンのための闘い」、「飢餓のための闘い」、「人間の尊厳のための闘い」であり、生存のための闘いであった。<sup>11</sup> 具体的には、ゲルマン化された都市(ブルノ)における搾取される労働者の活力が描かれ、シレジアの民衆はプロレタリアートとして働く人間の象徴とし

<sup>8</sup> Rudolf Fuchs, ebd.

<sup>9</sup> Jürgen Serke, ebd., S. 251.

<sup>10</sup> Die Schlesischen Lieder des Petr Bezruč, verdeutsch von Rudolf Fuchs Vorrede von Franz Werfel, Leipzig, 1913, S. 5.

て描かれている。ゲルマン化の問題を担う「ハルファル先生」、ゲルマン化によって祖国から離反する「ベルナルド・ジャーフ」、坑夫の貧困を体現する「マリチュカ・マグドローヴァ」、資本家との対立の問題を扱う「おまえとわたし」など、象徴主義とリアリズムの混淆した筆法で描かれる。

1937年版の翻訳テキストはペトル・ベズルチの70歳を記念して刊行され、ルードルフ・フックスのあとがきによれば、『シレジアの歌』（1916年刊）、『シレジアの坑夫の歌』（1926年）はすでに廃刊となっていたので、翻訳をすべて根本的に改訂、編集し読者に新版として提供できるようにした、ということである。<sup>12</sup> 「ペトル・ベズルチ、意に反した詩人」と題してルードルフ・フックスが前書きを書いた意図は、いかにペトル・ベズルチが世界文学の基準に照らして偉大で重要な詩人であるか、読者に伝えるためであるという。そして『シレジアの歌』から生じるであろう疑問に答えるために書いたという。おそらくこう書いた意図は、ペトル・ベズルチの置かれた歴史的な背景、さまざまなジャンルの混淆した詩の構成を解説すること、そしてなによりも重要なのは、ドイツ人への憎悪とともに散見される反ユダヤ主義的な傾向に対し、ユダヤ人、ユダヤ主義にたいする解説を付すことで誤解を解くために書いたと推測される。ペトル・ベズルチにおいてはつねにシレジアの民衆の共通の敵にぶつかり、その共通の敵とは、「フリードリヒ大公、詩のなかで挙げられている産業界の大物、ドイツ人（鉱山技師、営林署の役人）ポーランド人（移住してきた教師、または司祭）、ユダヤ人（材木商人、シュナップス蒸留酒製造業者、または高利貸し）」<sup>13</sup> であった。反ユダヤ主義的な言動も労働者の敵として搾取する側にいるユダヤ人を指していることに注意すべきであろう。

以下に、ルードルフ・フックスの翻訳との関わりをイルゼ・ゼーハーゼの年譜<sup>14</sup> によって跡づけてみる。まず、1922年にフックスは組織的な翻訳の計画をT.G.マサリクに提出したが、公式には支援はえられなかった。しかし、1924年から1939にかけては、自由主義の「プラハ日報」の外部編集員として1年間勤務したあとに、芸術担当の役を引き継いでいた。そして1924年には、「プラハ日報」のクリスマス号の1面に、リルケ、ヴェルフェル、ホフマンと並んで詩が掲載さ

<sup>11</sup> Petr Bezruc: Schlesische Lieder, Aus dem Tschechischen übertragen und eingeleitet von Rudolf Fuchs, Leipzig – Mähr.-Ostrau, 1937, S. 33.

<sup>12</sup> Ebd., Anhang

<sup>13</sup> Ebd., S. 11.

<sup>14</sup> Rudolf Fuchs: Die Prager Aposteluhr Gedichte, Prosa, Briefe, hrg. von Ilse Seehase, Halle und Leipzig, 1984, S. 421-437.



れ、一躍プラハ・サークルの仲間入りをすることになる。1926年にペトル・ベズルチの『シレジアの歌』の第2部がクルト・ヴォルフ書店から刊行される。1936年からは、ペトル・ベズルチに関するフックスの研究（「意志に反する詩人」）がモスクワの「言葉」誌に掲載されるようになる。1937年12月18日に、ルードルフ・フックスは「チェコスロヴァキアのドイツ語作家の擁護連盟」からヨーゼフ・ミュールベルガーとともに新たに創設されたヘルダー賞が授けられ、名実ともに、ルードルフ・フックスがチェコ語文学とプラハのドイツ語文学を架橋する役割を果たしていくようになる。1939年、イギリス亡命に亡命し、ロンドンでの亡命の、逃亡の報告が、1939年から1940年12月にかけて「ライギットからの詩」が発表される。<sup>15</sup>

以上のような経緯から明らかなことは、とくにプラハにおいてチェコとドイツの民衆の相互理解が20世紀に入りますます難くなる状況のなかで、フックスが見いだした結論は、双方が共通の言語を見いだすことによって解決につながるのは、ペトル・ベズルチの『シレジアの歌』の翻訳ということであった。

### 3. 翻訳家ルードルフ・フックス

フックスが最初に世に登場したのは、チェコの詩の翻訳者としてであり、「ヘルダー・ブレッター」誌で詩人のペトル・ベズルチの詩を紹介した。チェコの鉱山労働者の窮乏、抵抗が表現された『シレジアの歌』のなかの詩だった。国家的な弾圧に抵抗する芸術であり、ペトル・ベズルチの反逆者精神には、フックスの心を打ち、虜にして放さない調べがあった。<sup>16</sup>

ロンドン亡命中にルードルフ・フックスは詩集『流星』を回顧してこう言っている。「私は、それにはスラブ的なものが多くはいると思います。その多くは私の母国語の旋律的な柔和さから、私の故郷の実り豊かな平原の広さから、またあの完全な変革の時代にこの感受性の強い、創造的な若者を悲しみで満たしたのから出たのであり、古い信仰の源から湧き出る多くの希望でした……」<sup>17</sup>

こうしてペトル・ベズルチがドイツの文学界で詩作によって成功できたのは、ルードルフ・フッ

---

<sup>15</sup> Ebd., S. 421-437.

<sup>16</sup> Jürgen Serke, ebd., S. 250.

<sup>17</sup> Ebd.

クスというドイツ語を用いるチェコのユダヤ人の尽力があったことは自明であると同時に、積極的にチェコの文学をドイツ文学界に紹介し、推挽する役目を負ったクルト・ヴォルフ書店という出版メディアの存在も大きいことは言うまでもない。おなじくクルト・ヴォルフ書店からは、フックスの翻訳による17人の作家の選詩集『収穫祭の花輪』が「百年のチェコ詩から」の副題をつけて刊行されている。<sup>18</sup>

フックスはドイツ語文学とチェコ語文学、双方の文化圏の仲介者として強く意識し、自覚的に文学活動をしてきたことを、ロンドンで述懐しているが、このことの意義にプラハ政府が気づくのは1933年以降のことである。「プラハの教育省が、チェコスロバキアのドイツ周辺地域へのナチスの影響に抵抗するために、ベズルチのドイツ語の翻訳と選集『収穫祭の花輪』をあの地域の上級学校の図書に加えたとき、私にナチス・ジャーナリズムの激しいキャンペーンがむけられました。というのはナチスは同時に、社会主義のイデオロギーのゆえにつぎの二つの要因からくる危険を知ったからです。つまり深い根拠に根ざした私の仲介、そして私が多くの翻訳において支持した現実の、真実の社会主義という要因です……」<sup>19</sup> この仲介の役割の重大さ、危険性にいち早くナチスは気づき、翻訳による伝播の力を恐れ、キャンペーンを繰り返したわけである。

#### 4. おわりに

チェコ語を母国語とするルードルフ・フックスがユダヤ人のドイツ語作家となるという過程は、カフカが辿った道と同じであり、この限りにおいてこれらのプラハ・サークルの作家たちには共通点があると言える。だがカフカがプラハの精神的深部に分け入り書き続けたのにたいし、ルードルフ・フックスは前述したように、外に向かって針路を延伸させ、翻訳という仲介行為へと、国際共産主義へと向かった。さらにナチスからの迫害という要素も加わり、ナチスの時代を生き延びなくてはならなかった亡命者の宿命がルードルフ・フックスには暗い影を差すことになった。本稿では、人生の帰結を亡命者として過ごしたルードルフ・フックスとプラハの外縁に位置するオストラヴァ出身のペトル・ベズルチの出会いと交流のドキュメントをもとにして、翻訳という営為に焦点をあてて関係を再構成してみた。もともとプラハには多く存在しえないドイツ語読

<sup>18</sup> Ebd., S. 255.

<sup>19</sup> Ebd.

者を受容層とすることがプラハのドイツ語文学の宿命であり、さらに媒介作業を伴う翻訳書もまた同様であった。この文学の営為を支えたのが、クルト・ヴォルフというドイツの出版社であり、検閲を偶然突破して出版社に届くエピソード、戦場にいるルードルフ・フックスにゲラが届けられ、兵士の前で朗読されるエピソード、これらはすべて活字にたいする信仰からくるものであり、活字に寄せられる期待が遠心力となって、ヨーロッパの辺縁へと届けられたわけである。